

# 高齢者介護予防における『ヒューマン・アクティビティ』向上の取組

キーワード：ヒューマン・アクティビティ、QOL、介護予防、廃用症候群

○小嶽悠<sup>1)</sup>、本間雅義<sup>1)</sup>、廣橋啓<sup>1)</sup>、中野左緒梨<sup>2)</sup>、長谷川友紀<sup>2)</sup>、押木泉<sup>3)</sup>

1) デイサービスセンター 新潟あそか苑、2) 特別養護老人ホーム 新潟あそか苑、3) 新潟青陵大学

## I. 目的

施設ケアは従来の『生きていくための三大ケア』から利用者の『その人らしさ』を重視したケアへと変化してきている。そこで本研究では、施設ケアにおけるクラブ活動（運動、趣味活動など）から利用者の心的エネルギーの変化に着目し、指標（Hope Recover 以下、HR）を用いて「ヒューマン・アクティビティ（心の活動量）」の向上とその取組意義について考察する。

## II. 調査方法

- 1) 対象：①A デイサービスセンター（以下、A デイ）の約 1 年前と比べ、状態が変化していると思われる利用者 15 名とその家族②同センターの職員 13 名③A 特別養護老人ホーム（以下、A 特養）の入所者 2 名。
- 2) 利用者個人記録の整理：対象者の平成 22 年 5 月から平成 23 年 9 月までの記録から独自の指標（HR は利用者が自ら目的を持って施設生活を送れることを目標に 8 項目に分類されている。）を用いて心の変化を調査した。
- 3) アンケート調査：A デイの利用者家族と職員に、利用者の歩き方、着替え、表情の変化、会話の内容や頻度を 1 年前と比較して 5 段階評価し、その理由を記述してもらった。
- 4) 倫理的配慮：調査対象者と添付写真に写る利用者とその家族、職員に HR、アンケート、写真の使用目的を伝え、口頭にて許可を得た。

## III. 結果

- 1) 分析方法：個人記録から導き出される HR の変化とアンケート集計による回答項目と自由記述の質的分析。
- 2) 分析結果

G	2	約 35	(+ +)	(+)	(+)
H	3	約 25	(-)	(-)	(-)
I	2	50	(+ +)	(+)	(+)
J	3	約 43	( ± )	(±)	(+)
K	3	約 47	(+)	(±)	(+)
L	4	約 50	(+)	(-)	(±)
M	5	約 36	(-)	(-)	(-)
N	4	約 37	(-)	(±)	(-)
O	特養	—	—	—	(±)
P	特養	—	—	—	(+)

※職員は 13 名、家族は 14 家族より回答が得られた。

## IV. 考察

運動機能の低下も然ることながら、認知機能の低下についても各方面からの刺激により進行を予防できると言われているが、本研究ではクラブ活動（複数の選択肢を用意）の提供により要支援や要介護認定の利用者でも「自ら機能低下の防止を意識できるようになる」若しくは「無意識のうちに予防効果が表れている」などの効果が伺えた。以上のことから廃用症候群の予防はデイサービスセンターの大きな役割の一つであるとともに認知症の進行予防や介護負担の軽減にも繋がるものである。又、特養においても同様の効果が得られる。

## V. 結論と課題

要介護状態にある高齢者であってもクラブ活動に代表される「ヒューマン・アクティビティ」向上の取り組みが利用者の「心の活動量」を向上させ、各活動への参加意欲に繋がることがわかった。今後は利用者の生活歴や職歴に楽しさを盛り込んだ個別活動の提供も必要になってくると思われる。

## 参考文献

- 1) 高橋紀子. 高齢者と楽楽コミュニケーション. 黎明書房. 2008.
- 2) 池良弘. いますぐ使える福祉レクリエーション. 中央法規. 2003.

名前	一週間の利用回数	クラブ参加率(%)	HR の変化	家族集計	職員集計
B	2	約 56	(+)	(+)	(+)
C	4	約 48	(+ +)	(±)	(+)
D	2	約 36	(+)	(±)	(+)
E	2	約 56	(+ +)	(-)	(+)
F	3	約 40	(+)	(±)	(+)